

「やさしい風」が吹いている

「おじいちゃん、きもちええなあー。」

「そうやな。『やさしい風』が吹いてるなあ。」

「ええっ！？、風にもやさしいのとそうじゃないのがあるの？」

夏休み、親子3世代で琵琶湖畔に出かけ、バーベキューをしていた時のことです。小学1年生の娘は、「やさしさについて」をテーマに学校で勉強したところでした。「友だちのやさしさ」「家族やさしさ」「やさしいおにいさんおねえさん」・・・『やさしい風』？娘にとってはごく自然で素直な疑問です。

今年3月、アメリカの会社が開発した囲碁の人工知能が、世界最強と言われた棋士に圧勝し、世界に衝撃が走りました。囲碁は、人類が発明した最も複雑なゲームと言われ、人工知能が人間を超えるにはまだ10年はかかると言われる中での出来事だったからです。

先日、ある特集番組を見ていると、人工知能に感情を持たせる実験が紹介されていました。ロボットAが、積み木をタワーのように積み上げ、「ぼくが一生懸命つくったんだ」としゃべります。もう一台のロボットBにはその一連の流れを見せます。そしてBに対して、このタワーを「壊せ」と命令します。するとBは、「このタワーは友だち(ロボットA)が一生懸命つくったものだから壊せない」と言って人間の命令を拒否します。なおも「壊せ」と命令し続けると、Bは「どうしても壊せません」と泣き出しました。人間の命令に従うだけではなく、その命令の意味を、人工知能自身が判断したのです。

このまま人工知能が進化していけば、どんな未来が到来するのか。番組のリポーターは、将棋界の羽生善治さんでした。羽生さんは、「人工知能は使い方次第で天使にも悪魔にもなる。どうあれ、人工知能の開発はとまらない。わたしたちは、どう使っていくか考えなくてはならない。」と締めくくっておられました。

私たちは普段の生活の中で、相手の気持ちを推しはかりながらコミュニケーションをとり、人間関係を築いています。相手の気持ちを理解しようとする想像力や相手の痛みを自分ごとのように感じられる共感力は人間だけが持つ力です。

困っている人を放っておけない、誰かの役に立っていることに生きがいを感じる、他人の喜びや幸せを願う、違いを認めて受け容れる、そのようなことも、私たちだけがもつ、言わば「人間らしさ」です。

祖父が感じた『やさしい風』。それはきつと風量や温度だけではなく、その日の体調や目の前に広がる雄大な琵琶湖の景色、そして何より、休日に親子3世代がそろって出かけ、孫と過ごしているこの時間こそが祖父が感じた『やさしさ』の理由であったのではないのでしょうか。

「この前、おばあちゃんと散歩してた時な、『今日の夕日はきれいやなあ。ほんまにきれいや』言うてポロポロ泣いてはってん。」

「へえ、そんなことがあったんか。」

「そんなおばあちゃん見てたら、ようわからんけど、私まで胸がじーんとなったわ。」

「ほおー、おばあちゃんの心とひびき合ったんやな。」

「心がひびき合う・・・なんかたいこみたいやな。」

祖父と娘の他愛のない会話を聞きながら、「私たちがもつ感情」とは何か、「人間にしかできないこと」とは何か、そして、「人間らしさ」とは何か。改めて考えてみたいと思った夏の日でした。